

研究発表会

当館では、準備室時代より毎月1回のペースで学芸課職員による研究会を開催している。研究会は、日頃の研究課題についての発表のほか、計画中あるいは準備中の展覧会についての報告や検討の場としても機能し、研究成果を共有し、さらなる議論を深める役割を果たす。また、日常業務や国内外の出張、開催された展覧会の反省などの話題も盛り込まれるようになっている。

本年の発表題目および要旨は以下に記すとおり。館長および学芸課全職員の出席を原則とし、発表者が司会者を指名した上、40分程度の発表のあと質疑応答する形式で行った。

発表要旨

5月

「川村清雄《巨岩海浜図》について」

堀切正人

川村清雄《巨岩海浜図》（当館蔵）は、解明されていない部分の多い作品である。発表者は、この作品の旧蔵者と、描かれた場所についての情報を、川村清雄のご子息である川村清衛氏から得ることができた。旧蔵者については、作品の裏面に付帯していた張り紙に「厚様御遺物」との書き込みがあるが、これが徳川慶喜の4男・徳川厚とのことである。厚氏は昭和5年に逝去されているので、このことから、少なくともこの作品の制作年を昭和5年以前に絞り込むことができる。場所については、清衛氏や先学の示唆にもとづき、現地調査をしたところ、下田市入田浜にほぼ同定することができた。下田は、幕末に川村清雄の祖父である川村修就がお台場建造に尽力した場所でもある。ただし、実景では巨岩ではなく、浜に突き出た崖である。これらのことから、この作品が、何らかの寓意を持つものであるかどうかの推論を行ったが、今後も調査、研究を継続したい。

6月

「韓国海外研修報告：韓国国立現代美術館等の展覧会事例等について」

李 美那

2001年11月から2002年1月までの3ヶ月間、美術館連絡協議会からの学芸員海外研修助成を得てソウルに滞在した。主な研究目的は近代美術における日本と韓国の交流について、現存作家たちのインタビューも含めた実地の調査を行うことであったが、受け入れ機関である韓国国立現代美術館で、美術館組織と展覧会の

実施状況についても身近に経験できた。学芸課と展示課が相互補完的に展覧会企画を進めて行く方式や、アカデミーと呼ぶ付属の美術教育施設を持つこと、友の会に大企業の幹部や文化人を多数かかえ、美術館活動を広く社会の文化活動に直結させていること、国家の文化政策に機敏に反応する必要性などが日本と異なる主な特徴である。また、韓国で最大の近現代美術コレクションを持つ湖巖美術館は、社会の動きにより敏感に反応した企画展を開催するなど、国立私立両方において大変学ぶべきところが多かった。この研究会ではこれらの点について具体例を引きながら発表した。

7月

「イサム・ノグチの公園 - 「公共の芸術」ということについて」

村上 敬

造形諸ジャンルの純粋なあり方を目指して先鋭化してきた近代の芸術、さらに、その方法論に従って作品を展示するホワイト・キューブとしての美術館は公共的性格を獲得するに至らなかった。美術館の作品を誰も「パブリック・アート」とは呼ばない。イサム・ノグチが手がけ、残念ながら実現に至らなかった公園設計案、および彼がひとつの芸術的空間としてデザインしたアトリエ＝庭園美術館は、この状況を考える上で参考になる。彼の非在の公園案と実在の庭園美術館に共通する魅力的な環境（ときにはなだらかな起伏を巡る身体感覚によって喚起され、ときには林立する有機的な形態によって視覚的に作り出される）は、空間造形によって私たちに感性的な喜びをあたえてくれる。これは、かつて芸術が持っていた公共的性格を甦らせる造形芸術のひとつの有効な方法であり、現代における美術館の役割を考える上でも有益な示唆を与えてくれるものである。

8月

「今年度の学校利用の状況と今後の展望」

柏原幸泰

平成14年度から、新しい学習指導要領のもと、小中学校での授業が開始された。この中で、「地域の美術館と連携して…」とはじめて美術館という言葉が明記され、「各学年で独立した鑑賞の時間を置く」と鑑賞指導重視の方向性が打ち出された。そこで、美術館の理解者を小さいうちから育成するという考えもあって、学校利用を推進する取り組みを始めた。今回の発表は、これまでの利用状況と課題、今後の展望

についての考えをまとめたものである。

この取り組みが始まってまだ僅かしか経っていないので、数々の課題の解決や今後の方向性は定まらないが、先生方の集まりなどに多く参加し、様々な声に耳を傾けていくこと 積極的な広報を行い、知っていただく努力をすること 職場体験などの新しい取り組みも始まっており、こうした地道な積み重ねが大切であるという結論に至った。

9月

「名所絵」研究の諸課題 - 20周年記念展「名所絵展」の提案 -

飯田 真

「名所絵」とは、そもそも歌枕から出た名所を主題とする日本独自の絵画ジャンルであり、その源は9世紀にまで遡る。しかし、その影響は、中世・近世・近代にいたる日本絵画の風景表現に広く及んでいる。本発表では「名所絵」の問題について、(1) 名所絵とは (2) 名所絵の諸問題 - 近世から近代まで - (3) 現代的問題、の3つの観点から論じ、日本風景表現としての「名所絵」の意味について問題点を整理した。(1) では名所絵発生の経緯を整理し、(2) では、「名所絵と型」「実景図隆盛と名所絵の関係」「名所絵の変容」「写真との関係」など、近世・近代絵画と「名所絵」の個別的な問題を指摘するとともに、関連の展覧会開催の意義を述べ、20周年記念展の提案の機会とした。

10月

「ロダンにおける未完成」

南 美幸

晩年のロダンは、ダンサーをモデルにして、解剖学を無視した、時に細部や頭部・手足を省略した断片形式で、ムーヴマンとエネルギーを追及した作品群を制作した。これらの彫像は、作者の真面目な遊びと即興の結果であるが、その仕上げり度は作品によってさまざまである。ガントナーやアイネム、シュモルらの研究者は、ミケランジェロ、レオナルド、ロダンらに未完成という形式が認められるとし、個々の作家に沿ってその意図やプロセスを美学的見地から研究した。ロダンは断片や習作を作品と見なし、そうした表明によってトルソは彫刻作品の自立的モチーフとして認められるようになった。そこで、ロダンのムーヴマンの表現を追及した作品を対象に、その仕上げり度の相違が目的に対してどのような効果をもたらしているのか、

考察した。いわば未完成という観点から見た、ムーヴマンという同じテーマの中での位相の問題に関する考察である。

11月

「「眺め」をめぐる基礎的考察」

小針由紀隆

フランスの美術批評家、ロジェ・ド・ピールは、その著書『絵画原則講義』(1708年)において、風景表象の基本的類型として、英雄的様式と田園的(牧歌的)様式の2つを提示した。これら2つは好対照をなしているようだが、画家の想像力によってつくられるという点では共通しており、現実の実景を再現しているとは言いがたい。実景を再現するのは「眺め view」なのである。この発表は、「眺め」が18世紀末から19世紀初めにかけて西洋の風景画のなかに一つのカテゴリーを形成していく発展の諸段階について概略するものである。まず、18世紀における「眺め」に関する見方の変遷を、ド・ピール、ワトレ、ラコンブ、ヴァランシエンヌ等の記述に基づき辿り、その後1800年前後に描かれた「眺め」の実作例をじっくり観察した。「眺め」が、第3カテゴリーとして風景画の一領域に入り込んでいくにはド・ピールから見て1世紀近い時間が必要とされたのだった。

12月

「和田英作の《富士》について」

泰井 良

和田英作《富士》(大正7(1918)年 油彩、キャンヴァス 当館蔵)は、冬の早朝にみられる一瞬の光景を捉えた作品である。和田は、昭和26年、清水三保に住居とアトリエを構え、本格的に富士の連作に取り組んでいる。彼の描く富士は、類型化された名所絵の題材ではなく、自然を真摯に見つめ、対象を目の前にした際の新鮮な感覚を画面に残しながら、富士の雄姿を描いた完成度の高い作品群である。ここでは、黒田清輝がもたらした新派の明るい色彩表現と旧派の堅実な対象描写とが見事に融合し、富士という伝統的な題材に結実している。画家と自然との交感であるスケッチの感性を失うことなく、絵画としての完成度を高めた、和田の「富士」連作は、明治期の自然主義的リアリズムの成果を示す作例であるといつてよい。また、三保松原に伝わる「羽衣伝説」に執着した和田が目指していた方向性は、こうしたリアリズムの延長線上にある「構想画」であったと推察できよう。この問題は、

黒田の後継者としての和田の位置付けにとって、極めて重要な事であり、今後の検証課題としたい。

1月

「「名所絵」の意味」

山下善也

「風景画」や「名所絵」の議論のための話題提供として標記の内容で発表した。「名所絵」は、日本絵画の歴史や性格を考えるうえで有効なキーワードと思われる。しかし、この用語について、各人それぞれ違うイメージを持っているようで、今後、議論をすすめていくうえで共有化しておかなければならない事柄が多々ある。具体的には、1.名所絵の辞書上の意味 / 辞書類において「名所絵」という言葉が、どのように記述されているのか確認、2.家永論文と千野論文 / 日本の「名所絵」研究上とくに重要な、家永三郎氏および千野香織氏による研究についてそれぞれ紹介、3.最勝四天王院障子絵 / 名所絵の歴史をたどるうえで特に重要な事跡として、鎌倉時代の史料、最勝四天王院の名所障子絵のことについて強調、4.狩野探幽の富士山図 / 「名所絵」の伝統と深くかかわる具体例として館蔵の探幽筆富士山図をとりあげ、風景絵画における実景と連想の問題におよんだ。

2月

「アーチ、あるいは洞窟について」

新田建史

本発表では、西洋美術に見られるアーチ、あるいは洞窟のモチーフが、浮世絵版画にどのように受け入れられ、あるいは受け入れられなかったのかについて、若干の考察を行なった。

ヨーロッパで17、18世紀に製作された版画には、しばしば画面の最前面に置かれたアーチが見られる。洞窟の入口、あるいは出口というモチーフも、画面を縁取る額縁のような性格という点で共通し、同様の効果を持つものとして用いられていた。おそらくは日本にもそういった作例が流入していたと思われる。が、それらのモチーフは、初期の浮絵に類似の例が見られるものの、浮世絵の視覚の中から、最終的には排除されていったのではないか。また浮世絵に先立つ作例の中にも、画面を閉ざすアーチ・洞窟はあまり見られないのではなかろうか。ここには、同じモチーフに対する感じ方の東西での差違が、窺われるように思われる。

3月

「今村紫紅《宇津の山路》 - 《近江八景》との関連および遠近表現について」

森 充代

今村紫紅《宇津の山路》（明治45年（1912）掛幅装当館蔵）を取り上げ、紫紅の画業の中での位置を考察する。本作は、この時期さかんに紹介され始めた西洋絵画の影響を受けつつ、伝統的テーマを近代的な風景表現を用いて再生させた初発的な作例であり、加えて、色彩の対比の鮮明さ、点描の多用といった技法上の特徴は、同年制作《近江八景》（東京国立博物館蔵）を準備するものとして重要である。また、紫紅には珍しく遠近表現への強い志向が見られ、かつ、二次元的なモチーフの布置によって物語の内容とその情趣を効果的に表現する造形的な工夫も試みられており、新旧両方の要素が混在する。紫紅の画業において、歴史人物画から風景画への転換点にあって大きな位置を占めるとともに、近代日本画における新たな風景表現獲得のための実験的な作品として興味深いものである。